

西部中 便り

西部中学校便り No.13

令和8年 2月27日

文責 校長 田中 学

「鹿島・太良地区少年の夢合同発表会学力向上フォーラム」開催

2月8日にPTA主催の「少年の夢合同発表会学力向上フォーラム」が開催され、生徒会長2年 植松 廉さんが作文発表をしました。私たちにとって、とても大切なものは、「言葉」であることを考えさせられるとてもよい内容の発表でした。

「祖父の言葉」

鹿島市立西部中学校 二年 植松 廉

「大丈夫、大丈夫。」

私の祖父の言葉です。大好きだった祖父は、昨年四月に亡くなりました。八十八歳でした。厳格なところもありましたが、八人の孫にはとにかく優しい人でした。

私が小学四年生のときに野球チームに入ったことを知ると目を細めて顔をくしゃくしゃにして喜んでくれました。祖父が子供のときは、養子の身で野球をしたくてたまらなかったけれど、お金がかかるという理由でできなかったそうです。祖母は今でも遺影の前でその話をします。そして、その度に涙を流しています。『お父さん、廉が試合でヒットを打ったよ。お父さんもしたかったよねえ』と。祖父は、私が野球をしていることを自分のことのように喜んでくれました。杖をついてよく試合を見に来てくれていた祖父。以前、野球でスランプになり、全然打てなくなった時、レギュラーから外されるかもしれないと自信をなくし、余計に打てなくなるという悪循環に陥りました。そんな時に話を聞いてくれたのも祖父でした。祖父はいつものくしゃくしゃの笑顔で、『大丈夫、大丈夫。長い目で見ること。そのうちまた打てるようになってくる。』と、私に語ってくれました。その言葉を聞いて私の胸の中の重たいものがずっと軽くなったことを今でも覚えています。私はこれまで祖父のこの言葉を胸に、自分を信じて、コツコツ努力を続けてきました。その結果、いつのまにかスランプを抜け出し、四番バッターになり、試合で活躍することも多くなりました。今でもいっぱいいっぱいになると、自信を無くし、何も手につかなくなることがあります。しかし、そんなときは祖父の『大丈夫、大丈夫』という言葉とあのくしゃくしゃの笑顔を思い出すのです。そして、祖父とのたくさんの思い出が自分を奮い立たせてくれるのです。亡き祖父の言葉は今でも不安に押し潰されそうな時、私の背中を押してくれます。

日本ではこれから高齢化社会がどんどん加速していきと言われています。二〇五〇年には後期高齢者である七十五歳以上の人口が全体の約四分の一になると予想されています。これは日本がかかえるとても深刻な問題です。しかし、裏を返せば相談できる人が周りにたくさんいる時代と言えるのではないのでしょうか。落ち込んでいるときや焦っているときに、若者が経験豊富な人生の先輩の言葉に救われる。そのようなことも少なくないと思います。

私は将来、東京の大学に入り、大学野球で活躍するという大きな夢があります。私はそのために今、野球の練習や勉強を精一杯頑張っています。時には壁にぶつかって悩んだり、落ち込んだりすることもあるでしょう。しかし、その度に『大丈夫、大丈夫』という祖父の言葉を胸に、困難を乗り越えていきたいと思っています。